

■ 信じる者は救われたり救われなかったり…

修正： 2019.04.01

投稿： 2019.04.01



● 信じる者は救われたり救われなかったり…①

私たちは何かと物事を「二分」で捉えがちです。

マスコミの報道は「正しい」のか「間違っている」のか、
あの会社の活動は「善い」のか「悪い」のか、はたまた、
TPP 参加に原発問題、特定秘密保護法案に安全保障関連法案と、
政治がらみの判断も「する」か「しない」かの二択です。

そして、一旦、真偽や善悪を決め付けてしまえば、
視野は狭くなり、**盲目的に決定に従ってしまうもの**です。

しかし、時代の変化を前にすれば、
一度下した決定も、**そのうち正しくなくなる**わけですから、
盲目的に従っているのは、長期的には苦しめられかねません。

「〇〇は正しいのか間違っているのか？」

「〇〇は善いことなのか悪いことなのか？」

という二分の考え方だけでは、

「その考えはいつまで通用するのか？」

という部分が考慮されていません。よって、

人が変わり、社会が変わり、時代が変わったとき、

「もはやその常識は通用しない」と、

時代遅れ扱いされることになります。

世の中はコロコロと変わっていきます。

昔は善とされたものも今では悪となり、

いつの間にか裁かれるようになったりします。

よく、「老人は考えが古い」と言われています。

「古い考え」とは、「昔は正しかったけど、

今では正しいとは言えない考え」のことであり、

こうした古い考えを今だに使い続けている人は、

周囲から時代遅れと言われ老人扱いされます。

いつまで自分の考えは善でいられるのか、ということについては、

常に**把握**しておかなければなりません。さもなければ、

知らず知らずのうちに、正しくない方へと進み過ぎてしまい、

やがて周囲からも取り残され、**孤立**することになります。

(続)

//=====//

●信じる者は救われたり救われなかったり…②

「幸せになりたいなら、執着は捨てろ！」

と言われます。なぜか？

それは、時代や環境の変化に適応するためです。

執着すればするほど、変化には弱くなります。

新しい環境に適応するためには、

過去を捨てなければならないのです。

しかし人間、一度でも「人間は○○だ！人生は○○だ！」と

定義してしまえば、その通りに生きていくことになります。

執着が強ければ強いほど、なかなか抜けられなくなります。

「良い学校に進学し、良い会社に就職すべき」

と考える人からすると、受験勉強と出世競争こそがすべてであり、

積み重ねてきた学歴や職歴に執着してしまうことでしょう。

人間は、**最初に耳にした考え方に取り憑かれてしまうもの**です。

そして「馬鹿は死ななきゃ治らない」とも言われるように、

仮に自分が間違っていることに気付いたとしても、

自分が信じる価値観を人生の途中で修正することは容易ではありません。

そうして、他によりよい考え方があったとしても、

「今のやり方が一番いいはずだ。いや、そうに違いない！」

と、考え方はどんどん凝り固まっていきます。

これをカナダの精神科医は「**人生脚本**」と呼びました。
パラダイムとして、人生に多大な影響を与えています。
人生脚本は、親の考えによるものかもしれませんし、
育った国の宗教かもしれませんし、学校教育かもしれません。

自分を信じる人、国家を信じる人、神様を信じる人、
いずれも人生の早い段階で知った教えが根底にあり、
それが人生の方向付けを行っていくのです。しかし、

時代はコロコロ変わりますから、
定期的に考えを更新しないと置いていかれます。そうしたとき、
これまで自分が信じてきたものは、捨てなければなりません。

ゆえに、信念や信仰は、ほどほどであった方が、
幸せでい続けられる可能性は高まると言えます。

(続)

//=====//

●信じる者は救われたり救われなかったり…③

人間は、一番初めに耳にした考え方に
取り憑かれてしまう、という話でした。

地下鉄サリン事件の実行犯の一人に対して、裁判長は、
「およそ師を誤るほど不幸なことはなく、
この意味において、被告人もまた、
不幸かつ不運であったと言える」と、

同情の言葉をかけています。自分がこれと信じた人が
間違った人であったとなれば、どうにもなりません。

その人の第一印象が良ければ、何となく聞き入ってしまうものです。
そして回数を繰り返すうちに、いつの間にかその人を深く信じてしまい、
最終的には、その人にとことんついて行ってしまうものです。

ホロコーストと呼ばれているユダヤ人虐殺も、
当時のナチス・ドイツ兵からしてみれば、
「これは正しいことなのだ」と
本気で信じて任務を遂行していただけです。

その中で中枢の人物の一人とされていたアイヒマンも、
職務に忠実なだけの一人の公務員にすぎませんでした。
当初は、とんでもない大悪党とされていました、
出廷させられた際の姿はひよろひよろで、世界は驚きました。

教祖様を信じてても裏切られるかもしれない、
国家元首を信じてても裏切られるかもしれない、
宗教も政治も絶対的に正しいとは言えない、…、

では、何を信じればいいのか。宗教か、政治か、
はたまた、仕事か、お金か、家族か、自分自身か、
何を基準とすれば、よりよい人生を送れるのでしょうか？

当サイトでは、生き方と考え方を中心に、
「原理・原則」を据えることを推奨しています。
みなさんはどうでしょうか？

(続)

//=====//

●信じる者は救われたり救われなかったり…④

占いの広告のキャッチコピーで、

「恐いほどよく当たる占いです！」

というような文言をたびたび目にします。

この「**恐いほどよく当たる**」と言う裏には、

**「そもそも占いなんて外れて当たり前なんだけど、
その中でもこの占いは割とよく当たるんだよ！」**

というニュアンスが含まれています。

もし 100 発 100 中なのであれば、

「よく当たる」なんてわざわざ言いません。

当たるのだから「当たります！」と強調する必要はないのです。

むしろそこまで強調されると嘘っぽく感じてしまうものです。

「この飛行機は墜落しません！絶対に墜落しませんから！」

絶対です。本当です。絶対に墜落なんてしませんから！」

と**強く言われれば言われるほど不安になる**ことと同じです。

天気予報でも、「恐いほどよく当たる天気予報」とは言いません。

占いと違って天気予報は、「当たって当たり前」の認識だからです。

※と言うより天気予報は確率論です。

「当たります！当たります！」と言うのは、実のところ、

「(そもそも当たらないものだけど)当たります！」の意味なのです。

当サイトでは、これまでに、

「蒔いた種からは必ず芽が出る」ということを述べてまいりました。

それは「恐いほど芽が出る」のではありません。

「必ず芽が出る」のです。必ずです。

大根の種を蒔いたなら大根の芽が出ます。

「何の芽が出るか占おうか♪」と占う必要はありません。

必ず大根の芽が出るのです。

こうした**観察**と**考察**を基に、あらゆるところで

こうした関係は保たれていると**仮定**し、

「善因善果、悪因悪果、自因自果」

などのように発展していきました。

当たるか外れるか分からない不安定な考え方では、
安定した幸せは得られません。よって、こうした、
常に成り立ち続けるであろう不変的な考えを体系化し、
「原理・原則」とし、当サイトでは重視しています。

(完)

//=====//

Web サイト：

心を力学する ー原理・原則に基づく生き方を考えるー

著者：

時無 和考(Tokinashi Kazutaka)